

2020年12月6日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「神は我々と共におられる」

聖書：マタイによる福音書1：18～25

ここはヨセフに対するキリストのいわゆる「受胎告知」になる。ヨセフは、婚約者のマリアが身重の体であると知ると「ひそかに縁を切ろうと決心した」とある。それはヨセフが「正しい人」であったからであるが、ユダヤ人として律法を重んじるがゆえに、この婚約は無かった事にしよう決心する。それはヨセフの最大限の配慮があった。もし、婚約者がいて夫の子でないものを宿しているとなれば、当時の律法では姦淫罪として極刑にあたる石打刑に処せられてしまう。ヨセフは、それは余りにも忍びないとして、「ひそかに縁を切ろうと」したわけだ。

しかし、天使がヨセフの夢に現れ、「恐れず妻マリアを迎え入れなさい」と言う。この事は、「正しい人」ヨセフにとって非常に難題として捉えた。この事は律法に反するからである。ただこのことは、ともすると神に対して、「いや！これは律法を犯すことになりますから受け入れられません」なんて言っちゃうかもしれない状況だ。もしそうなら、律法が正しく、神がおっしゃることが間違いであるとなり、これはもう本末転倒になる。ただこの世は、大抵が人間の業が正しく、神の業、神の言葉がないがしろにされているということが多い。まさに本末転倒な状況がこの世にはある。

最後に、ヨセフの決断は何によって踏み出せたのか？これまで培ってきた、信じてきた律法を越える決心をして、誰の子とも知れない子を宿したマリアと共に歩む決心が何故できたのか？ 23 節に「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」とある。この箇所はイザヤ書 7 章 14 節の言葉である。「インマヌエル」とはヘブライ語。「正しい人」ヨセフは、このイザヤ書の言葉を何度も呪文のように聞いていたことかと思う。

今、ヨセフの中で「インマヌエル」という言葉が、現実のこととして受け止めてられて行く。御言葉が生きた言葉として聞いていく時、「インマヌエル」が呪文ではなく、「神は我々と共におられる」という確信となったということ。神が私と共におられると信じる時、ヨセフは未知なる世界へとマリアと歩み出していく。

私たちは、「インマヌエル(神は我々と共におられる)」という御言葉を信じているか？ クリスマスは、そのことの間いでもあり、神はあなたと共にいるという宣言でもある。「神は我々と共におられる」という宣言であるクリスマスを感謝と共に迎えたい。(神谷)